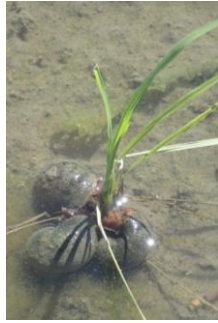


病害虫発生予察情報予報第 2 号 (6 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

6 月 1 日～8 月 31 日の 3 か月間は農薬危害防止運動期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理を徹底しましょう。

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	6 月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稻 (早期)	葉いもち	やや多	 スクミリンゴ ガイ
	イネミズゾウムシ	やや多	
水稻 (早植え)	葉いもち	やや多	
	イネミズゾウムシ	やや多	
水稻 (普通期)	葉いもち	並	1. 病害虫全般 (いもち病、トビイロウンカ等) 育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。 2. スクミリンゴガイ 被害を防止するため、移植後の浅水管理や薬剤防除、用排水路での貝及び卵塊の捕殺等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、令和 7 年 5 月 28 日付病害虫対策資料第 4 号及び「スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) 防除対策マニュアル (佐賀県 HP: https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003113526/index.html)」を参照する。 3. もみ枯細菌病・白葉枯病 もみ枯細菌病が育苗箱で発生した場合や、白葉枯病の常発圃場では、これら病害に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。 4. 紋枯病 昨年本病の発生が多かったほ場では、紋枯病対象成分を含む育苗箱施用剤を使用する。
	スクミリンゴガイ	やや多	
水稻全般	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	やや少	

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	やや少	 炭疽病
	苗立枯症 (炭疽病・疫病・萎黄病)	並	
	ハダニ類	並	
	アブラムシ類	やや多	
	1. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） 前作では、炭疽病により定植苗の不足や本圃での立枯れにより大きな被害を受けた圃場がみられた。今作での発生を抑えるため、親株床から定期的な薬剤防除を徹底する。また、伝染抑制効果が高いビニル雨よけ下での育苗を行う。さらに、その日の天候やポットの乾き具合を考慮して灌水を実施する、ポット間隔を十分にとり通風を図る等、高湿度条件が長時間続かないよう注意する。なお、立枯性病害が発生した株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。		
アスパラガス	茎枯病	やや多	 褐斑病
	褐斑病	やや多	
	斑点病	やや多	
	アザミウマ類	並	
	ハダニ類	多	
	1. アザミウマ類 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落としを行うなどして発生状況を確認し、早期防除に努める。 2. ハダニ類 一部のほ場で発生が認められている。多発生すると防除が困難となるので、発生初期に防除を徹底する。虫見板への払落としを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。 3. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。		
施設果菜類	1. アザミウマ類、コナジラミ類 アザミウマ類やコナジラミ類が施設から飛び出すと、野外で増殖し、次作の施設へ侵入する。これら害虫の確実な死滅と、ウイルス病罹病株を確実に枯死させるために、栽培終了後は、十分な期間を確保し、施設の密閉処理（蒸し込み）を確実に行う。（詳細は、令和7年5月28日付け病虫害対策資料第5号参照）。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	 チャバネアオカメムシ
	1. 病害全般 6月は例年降雨日数が多いので、降雨の合間を確認して早めに薬剤を散布する。 2. スピードスプレーヤーによる薬剤散布 全列走行を基本とし、薬液が到達しにくい園周縁部等は手散布を実施するなど、丁寧に散布する。		
カンキツ	そうか病	並	 かいよう病
	かいよう病	多	
	黒点病	やや多	
	灰色かび病	多	
	ミカンハダニ	やや少	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	1. かいよう病 6月までは本病の重要な防除時期であり、今後の多発生を防ぐため、本病が発生しやすい園および幼木園では防除を徹底する。 2. 傷果、落果防止(灰色かび病、チャノキイロアザミウマ、果樹カメムシ類等) 傷果や落果の原因となる灰色かび病やチャノキイロアザミウマ等の傷果の原因となる病虫害に対する防除を徹底する。		
ナシ	黒星病	並	 黒星病
	ナシヒメシンクイ	やや多	
	1. 夜蛾類 被害を防止するため、忌避灯を設置する。また、点灯開始前に、点灯の有無、点灯時の園内の明るさ（1ルクス以上）及び点灯時間を必ず確認する。 2. ハダニ類 密度が高くなると防除が困難となってしまうため、寄生葉率 10%未満または1 葉当たりの雌成虫数 0.5 頭未満の時点で薬剤を散布する。薬剤は、散布ムラがないように丁寧に散布する。		
ブドウ	黒とう病	やや多	 べと病
	べと病	並	
	褐斑病	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	1. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 小豆大の時期までの防除を徹底する。やむをえず袋かけ前（大豆大期）に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。		

作物名	病虫害名 ^{注1)}	6月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
キウイフルーツ	1. かいよう病 感染防止のため、6月までは <u>すべての園において</u> 、銅水和剤を主体とした 定期的な薬剤防除を実施 する。なお、幼木は成木に比べ発病しやすく、また枝枯れや樹液の漏出など激しい症状が出やすいため、特に防除対策を徹底する。		 葉の斑点症状
茶	炭疽病	並	 炭疽病
	カンザワハダニ	やや少	
	クワシロカイガラムシ	多	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	
	チャノコカクモンハマキ	やや多	
	チャノホソガ	並	
	1. 炭疽病 防除適期の新芽開葉初期に薬剤を散布する。二番茶摘採後に枝条更新を行わない園では、必ず薬剤を散布する。本病は、降雨時に新芽に感染するため、降雨前の予防剤による防除を基本とし、降雨後は浸透性殺菌剤で防除を実施する。多発が予想される場合には、保護殺菌剤（開葉期）と浸透性殺菌剤（2～3葉期）の体系防除を実施する。 2. クワシロカイガラムシ 第一世代幼虫ふ化最盛期に薬剤散布できなかった発生園では、7月頃の第二世代のふ化最盛期の3～4日後に薬剤を散布する。 3. チャトゲコナジラミ 成虫の発生ピーク2週間後頃の若齢幼虫発生期に裾部を中心に薬剤を散布する。また、裾刈りした残さを土壌混和すると効果的に寄生密度を低下させることができる。		

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病虫害総合防除計画」も参照してください。

病虫害総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



Ⅱ. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクがあります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

6 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 6 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 7 年 5 月 22 日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年よりやや多い」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%) 及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 6 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (23.5℃)	40	やや高い
降水量	20	40 (327 mm)	40	やや多い

Ⅲ. 6月の予報

水稻（早期、上場地域）

[【概要に戻る】](#)

定期調査:12圃場

調査日:5月22日

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率: 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比: 並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。
- (2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

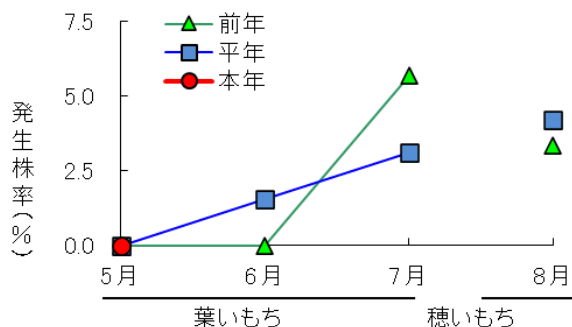


図1 早期水稻でのいもち病の発生推移

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 食害株率: 38.0% (平年 38.4%、前年 51.3%)

平年比: 並 (±)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上確認されたら、薬剤防除を行う。

水稻（山間早植え）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや多い

2) 予報の根拠

- (1) 前年の穂いもちの発生状況

令和6年産の山間早植え水稻における穂いもちの発生は、平年並であった。〈±〉

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。

(2) 葉いもちの発生が確認された圃場では、早急に防除を実施する。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 前年の発生状況（越冬密度）

前年の発生は平年並で、越冬数は平年並と考えられる。〈±〉

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本田で成虫が10株当たり5頭以上みられたら、薬剤防除を行う。

水稻（普通期）

[【概要に戻る】](#)

1. 葉いもち

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 前年の穂いもちの発生状況

令和6年産の普通期水稻における穂いもちの発生は、平年よりやや少なかった。〈－～±〉

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 苗いもちの発生がみられたら、早急に取り除き、防除を行う。

(2) 畦畔に放置された予備苗や残り苗は、葉いもちの伝染源になるので、速やかに処分する。

(3) 育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。

2. スクミリンゴガイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 越冬状況（図1参照）

令和6年(2024年)12月～令和7年(2025年)2月の佐賀市の平均気温は6.3℃であり（平年7.4℃（10年平均））、水田内での越冬生貝率は平年並と推定される。〈±〉

※冬期の気温と翌春の越冬生貝率との解析の結果、両者の間に明確な正の相関が認められる。

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 被害を防止するため、移植後の浅水管理や薬剤防除、用排水路での貝及び卵塊の捕殺等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。
- (2) 防除対策の詳細は、令和7年5月28日付病害虫対策資料第4号および「スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）防除対策マニュアル（佐賀県HP: https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003113526/index.html）」を参照する。

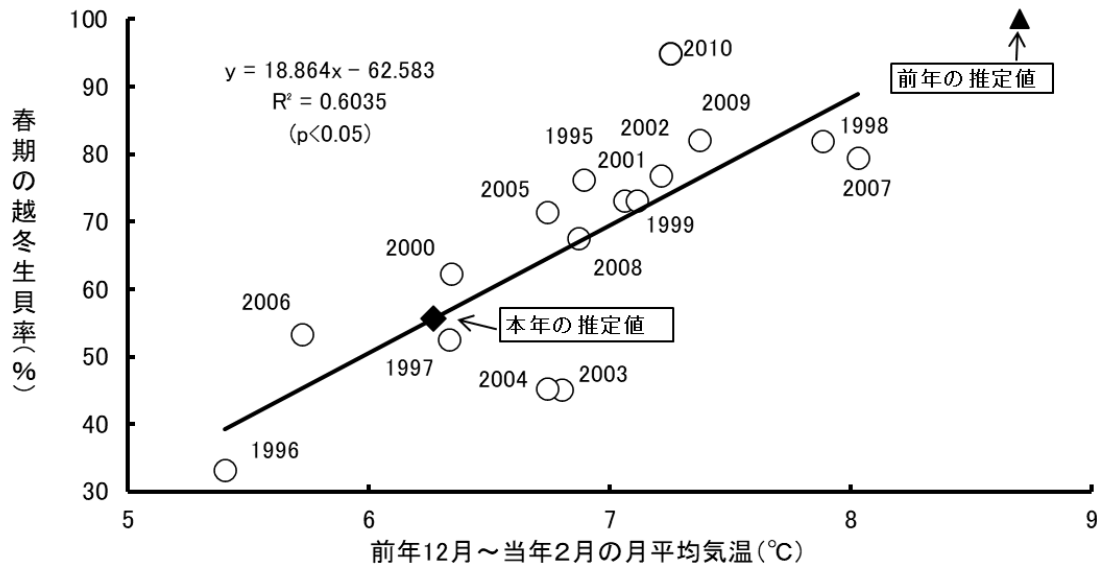


図1 水田内でのスクミリンゴガイの越冬生貝率と冬期の平均気温との関係

○: 1995～2010年の実測値（佐賀市の気温と、佐賀市内の同一水田における越冬生貝率。水田の越冬調査は2010年で終了）、◆: 2024年12月～2025年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した本年(2025年)春期の越冬生貝率。▲: 2023年12月～2024年2月の気温を用いて上記の関係式から推定した前年(2024年)春期の越冬生貝率。

水稲（全般）

[【概要に戻る】](#)

1. 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（早期水稲）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

② 小麦における20回すくい取り（表1参照）

ヒメトビウンカ幼虫数20.0頭（平年35.6頭、前年10.5頭）

平年比：並（±）

(2) 近年の動向（図2参照）

小麦から採集したヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒率は、近年低く推移している。

（～±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病はヒメトビウンカが媒介するため、ウンカ類を対象とした育苗箱施用剤を使用する。

(2) 発病株が認められた圃場では、発病株を抜き取るとともに、ヒメトビウンカの防除を行う。

第1表 各調査地点におけるヒメトビウンカの発生

調査地点	小麦圃場でのヒメトビウンカの発生 (令和7年5月16日)
	20回すくいとり虫数(頭) (2圃場平均)※
佐賀市1	32.5
佐賀市2	20.0
鳥栖市	12.5
神埼市	11.0
小城市1	2.5
小城市2	59.0
多久市	25.0
武雄市	8.0
鹿島市	5.0
吉野ヶ里町	16.5
白石町	27.5
平均	<u>20.0</u>

※小城市2のみ3圃場平均。

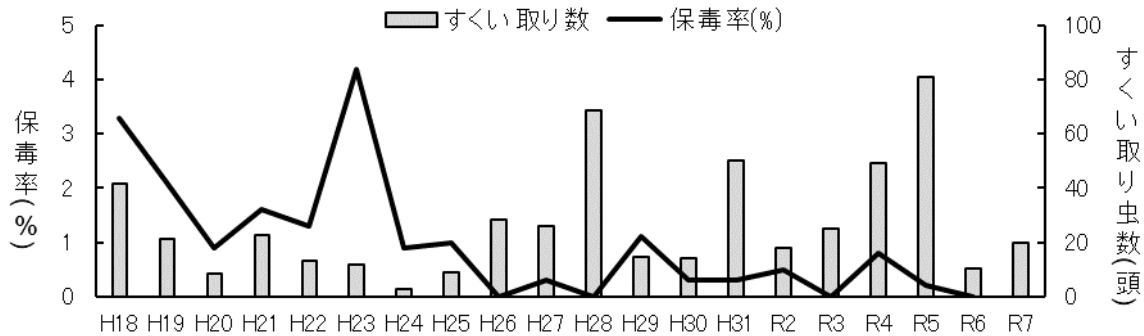


図2 県内の小麦圃場におけるヒメトビウンカすくい取り数とイネ縞葉枯ウイルス保毒率の推移

イチゴ（育苗圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場

調査日：5月19～22日

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年 6.9%、前年 0%）

平年比：やや少（一～±）

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

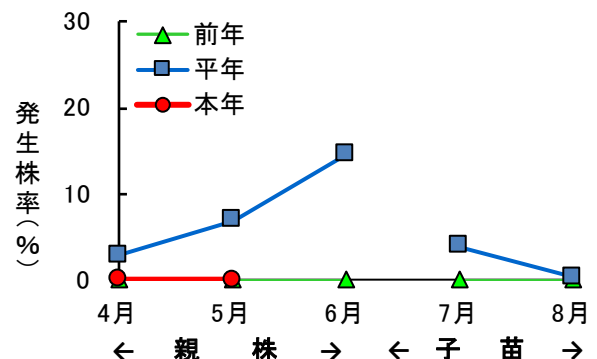


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 定期的な薬剤防除を実施する。

2. 苗立枯症（炭疽病・疫病・萎黄病）

- 1) 予報の内容
 発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1 参照）
 発生株率：0%（平年0.02%、前年0%）
 平年比：やや少（～±）
- (2) 6月の気象予報
 降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

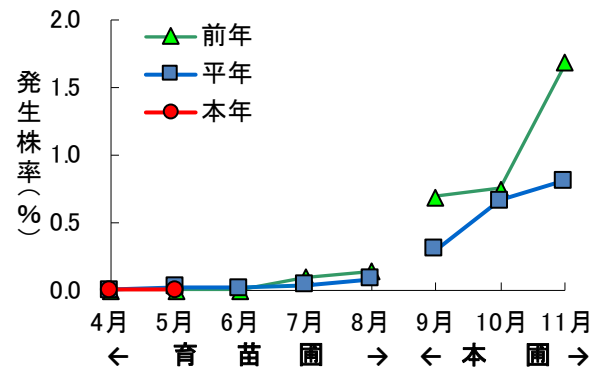


図1 イチゴ立枯症の発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 近年発生が問題となっている炭疽病の対策として、親株床から定期的な薬剤防除を徹底する。また、伝染抑制効果が高いビニル雨よけ下での育苗を行う。
 (2) その日の天候やポットの乾き具合を考慮して灌水を実施する、ポット間隔を十分にとり通風を図る等、高温湿度条件が長時間続かないよう注意する。
 (3) 立枯性病害が発生した株は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。

3. ハダニ類

- 1) 予報の内容
 発生量：平年並
- 2) 予報の根拠
 (1) 発生の現況
 ① 定期調査（図1 参照）
 発生株率：8.0%（平年9.2%、前年26.0%）
 平年比：並（±）
- (2) 6月の気象予報
 気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件（±）

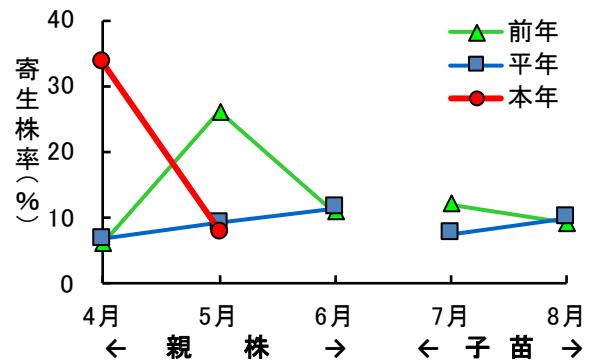


図1 ハダニ類のイチゴ育苗床での発生推移

- 3) 防除上注意すべき事項
 (1) 薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。ただし、これらの薬剤は卵に対して効果が無いものが多いので、5～7日間隔での2回散布を1セットとし、発生状況に応じて数セット散布する（令和7年4月28日付け病害虫対策資料第3号参照）

4. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：16.0%（平年10.2%、前年14.8%）

平年比：やや多（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。

(2) 早期発見、早期防除に努める。

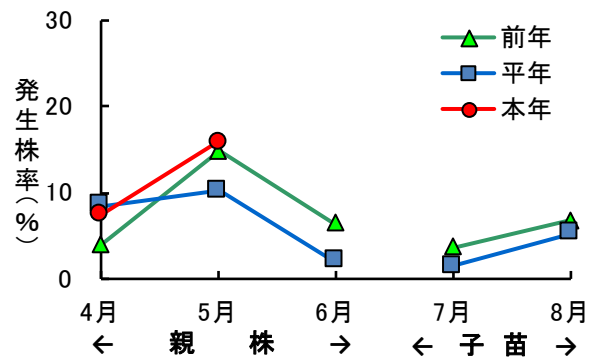


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：5月19～20日

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生茎率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。

(2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

(3) 降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。

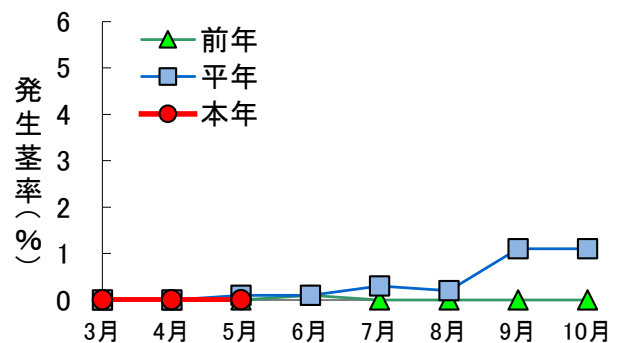


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年0.4%、前年0%）

平年比：並（±）

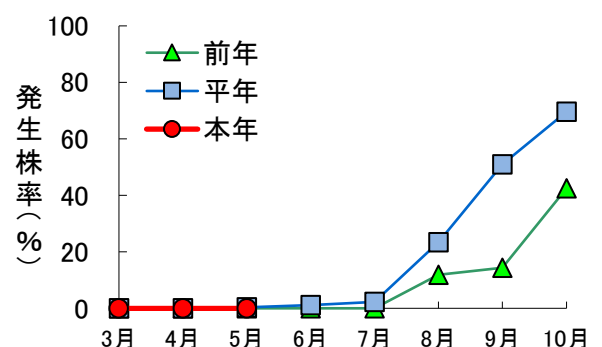


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

- (2) 6月の気象予報
降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。
(2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

3. 斑点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：0% (平年 0.5%、前年 0%)

平年比：並〈±〉

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。
(2) 予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。

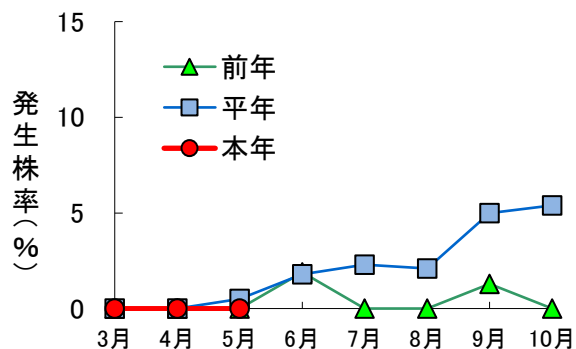


図1 アスパラガス斑点病の発生推移

4. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：8.8% (平年 40.6%、前年 30.6%)

平年比：少〈－〉

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落としを行うなどして発生状況を確認し、早期防除に努める。

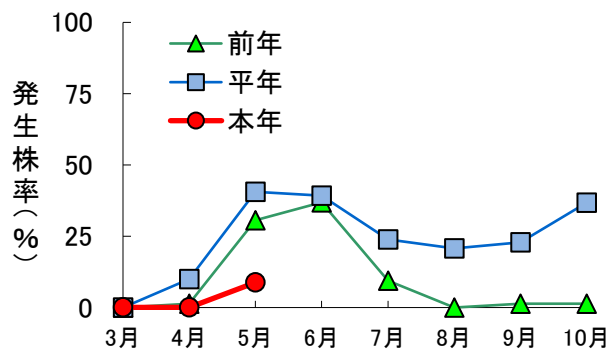


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

5. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：2.5% (平年 0.1%、前年 0%)

平年比：多〈＋〉

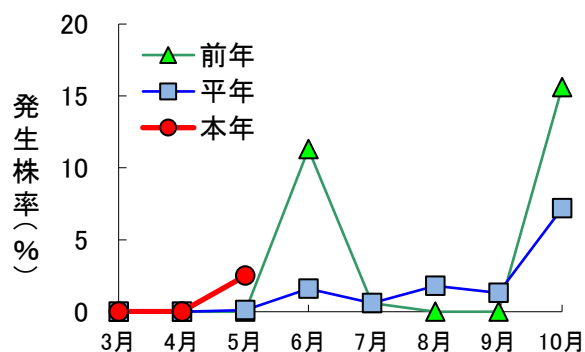


図1 アスパラガスでのハダニ類の発生推移

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発生すると防除が困難となるので、発生初期での防除を徹底する。虫見板への払落しを行い、寄生が認められれば直ちに薬剤防除を行う。

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査

- ①越冬地点率：29.4%（平年 44.8%、前年 84.2%）

平年比：やや少（－～±）

- ②平年越冬虫数：0.14 頭/㎡（平年 0.33 頭/㎡、前年 0.84 頭/㎡）

平年比：やや少（－～±）

・地点別データ等は令和7年度病害虫発生予察情報第1号（4月の予報）を参照。

(2) 発生の現況

①予察灯（図1参照）

平年比：やや少（－～±）

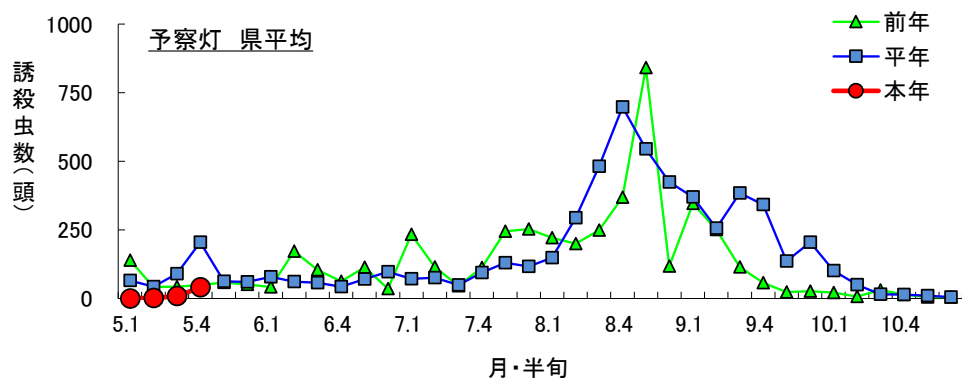


図1 予察灯（佐賀市、小城市）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

②フェロモントラップ（図2参照）

平年比：やや少（－～±）

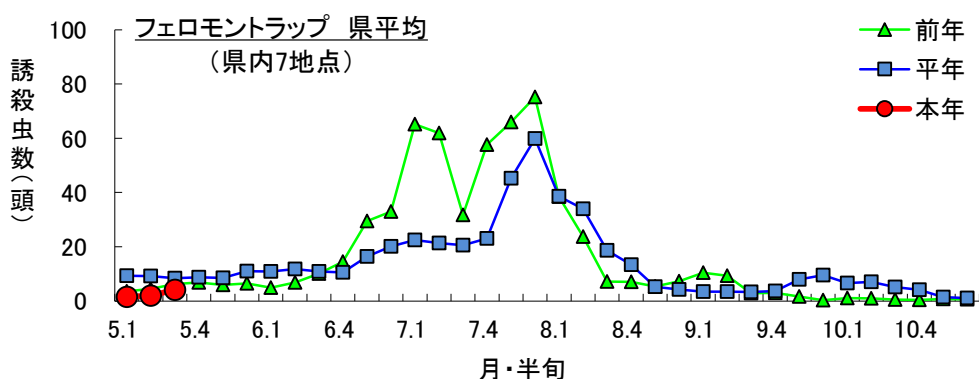


図2 フェロモントラップ（小城市、鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、唐津市鎮西町、基山町、太良町）による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生状況は地域や園により異なるため、園内外を確認し、発生が確認されたら防除を行う。

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：5 月 15～19 日

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果実に薬害を生じる場合があるため、デランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。
ただし、散布する間に 200 mm以上の降雨があれば薬害を生じにくい。

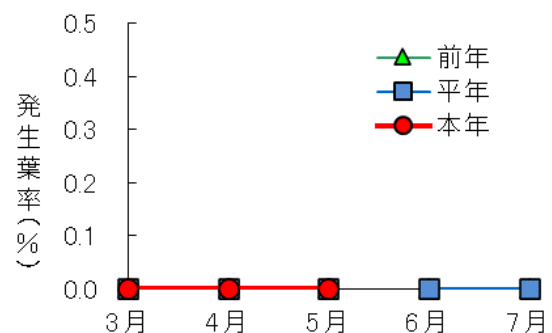


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生葉率：0.01%（平年 0%、前年 0%）

平年比：多（+）

②中晩柑での発生状況

一部の園では、今年の春葉で発病が確認されている。

(2) 6 月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6 月までは本病の重要な防除時期であり、前年に発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園（幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等）など発生が問題となる園では、無機銅剤水和剤（クレフノン 200 倍加用）で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は 20～25 日とする。
- (2) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は枝を遅くまで伸長させ、本病にかかりやすい期間を長くするため行わない。

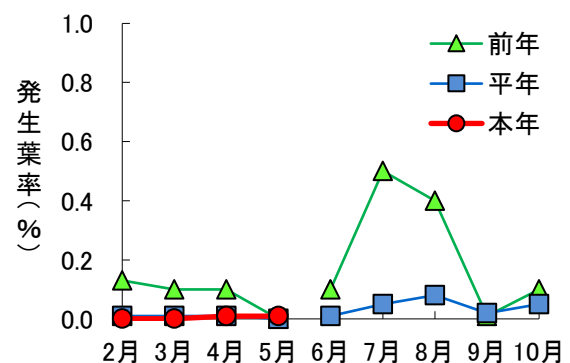


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実に感染しやすい梅雨期に薬剤防除を徹底する。

(2) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、累積降雨量が200～250mm(マシン油乳剤加用の場合は300～400mm)に達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。

(3) 枯れ枝や剪定枝は伝染源となるため除去し処分する。園内に残った切り株は抜根するか、ビニルの袋などで全体を覆って病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。

4. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生花弁率：4.8% (平年4.0%、前年2.8%)

平年比：並〈±〉

②温州ミカンの着花状況

本年は着花量が多く、多発生の条件〈＋〉

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±～＋〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発病が多い園では、傷果防止のために一次落果期(6月第1半旬頃)を中心に薬剤を追加散布する。

5. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1参照)

発生葉率：1.1% (平年7.2%、前年0.3%)

平年比：やや少〈－～±〉

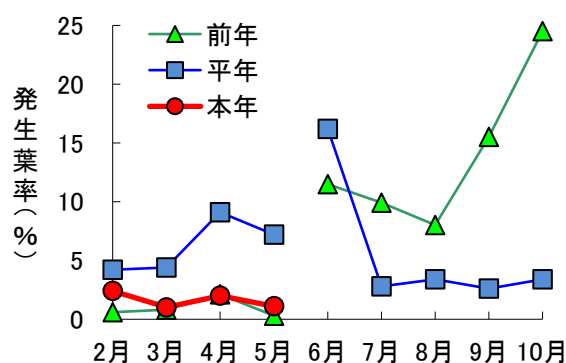
(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 低密度時(寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5～1頭)に防除を行う。

(2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。



注) 5月下旬までは旧葉を調査

6. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（図1参照）

平年比：やや少（－～±）

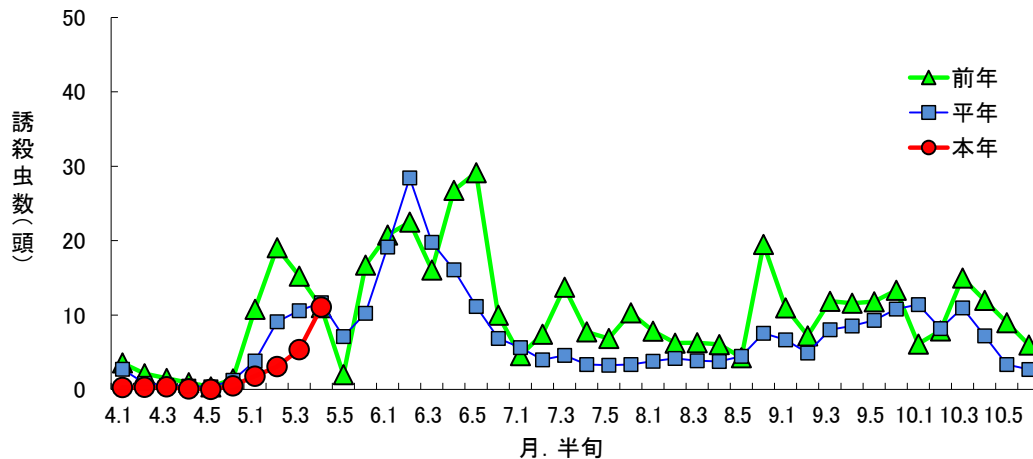


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移（果樹試験場調査）

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 近年は気温が高かったため第2世代成虫の発生ピークは6月上旬頃であったが、本年は気温がほぼ平年並みで推移しているため発生ピークがやや遅くなると予想される。被害を防止するため、6月上旬～中旬頃までに薬剤防除を実施する。
- (2) 本虫の発生源となるイヌマキ、サンゴジュ等を防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナ シ

[【概要に戻る】](#)

定期調査（9圃場）

調査日：5月20日

1. 黒星病（本文掲載）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1、2参照）

発生葉率：0%（平年0.5%、前年0.2%）

平年比：やや少（－～±）

発生果率：0%（平年0.5%、前年0%）

平年比：やや少（－～±）

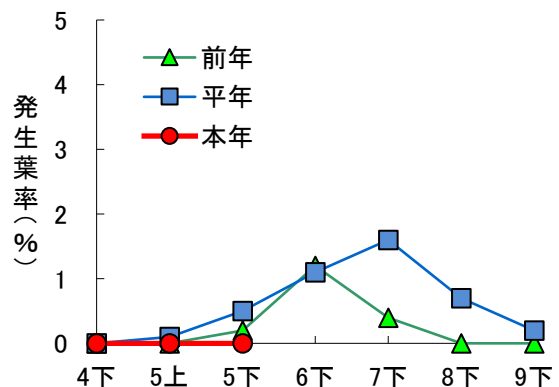


図1 ナシ黒星病（葉）の発生推移

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病葉や発病果実は伝染源となるため除去し、処分する。
- (2) 曇雨天が続くと発生が多くなるので、天候を見ながら適切に防除する。
- (3) 6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用するが、既に発生している場合はDMI剤を散布する。また、6月下旬頃は主要な感染時期であるため、DMI剤を用いた防除を必ず実施する。

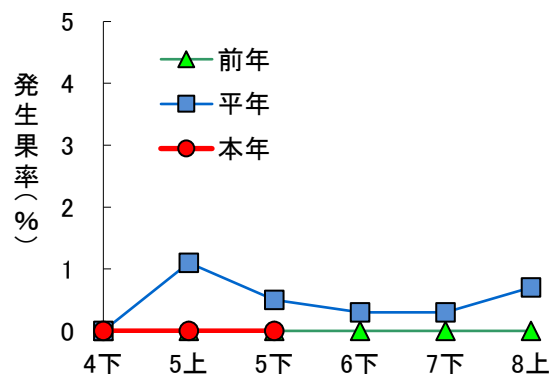


図2 ノシヒメシンクイ(未)の発生推移

2. ナシヒメシンクイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 県内に設置したフェロモントラップ (図1 参照)

平年比：並〈±〉

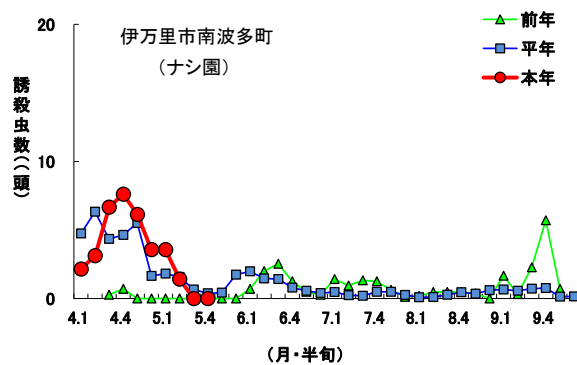
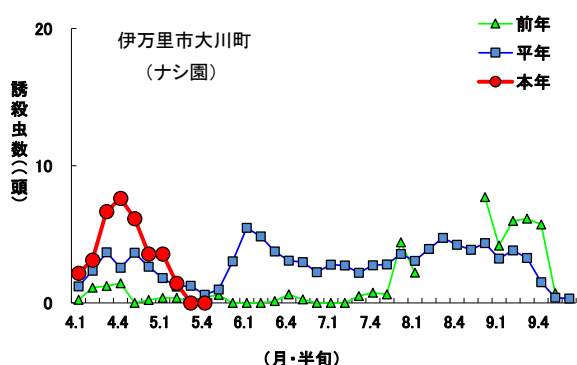
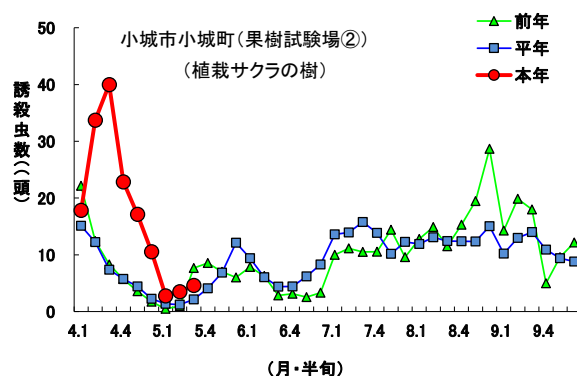
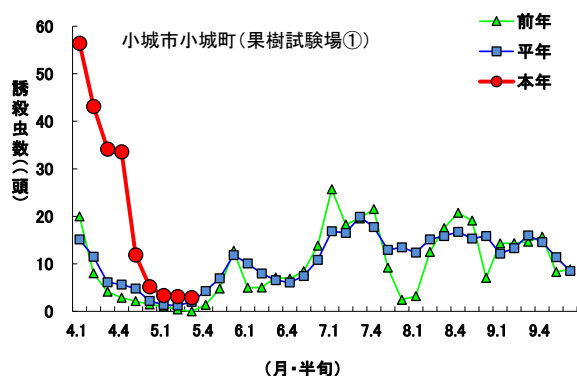


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業振興センター調査)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件〈±〜+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 交信攪乱性フェロモン剤は6月上旬までに設置する。

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査（6圃場）

調査日：5月15～20日

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.5%、前年0%）

平年比：並（±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝葉の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

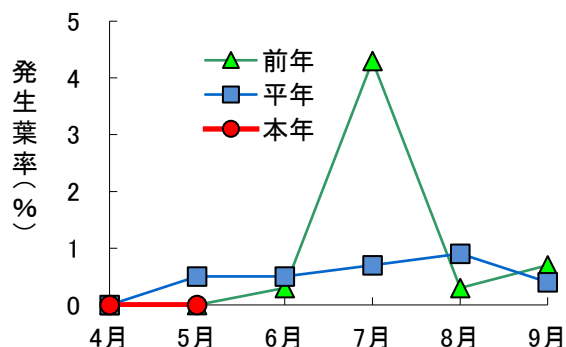


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0.1%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

降水量はやや多く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) ベと病の罹病葉は伝染源となるので必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する

(2) 降雨により感染が進展するため、降雨前の予防散布を徹底する。

(3) ブドウベと病では、ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本病の防除には使用しない。

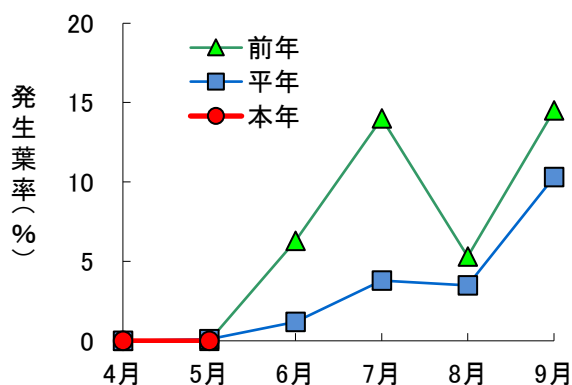


図1 ブドウベと病の発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ（カンキツのチャノキイロアザミウマ（図1）参照）

平年比：やや少（-～±）

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6月中旬～7月中旬頃は主要な加害時期であるため、薬剤防除を徹底する。
- (2) 袋内への侵入を防止するために、袋の締め口をしっかりと締める。

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場

調査日：5 月 15 日～19 日

1. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1 参照)

発生株率(雄繭)：18.6% (平年9.0%、前年 4.3%)

平年比：多(+)

発生株率(雌成虫)：25.0% (平年10.7%、前年 3.6%) ※平年値はH30～R6の7か年平均

平年比：多(+)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件(±)

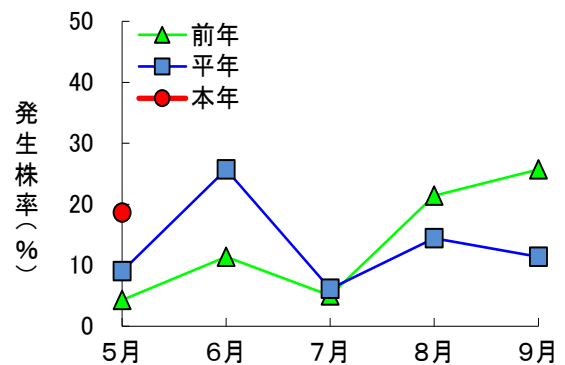


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 第一世代幼虫ふ最盛期に薬剤散布できなかった発生園では、7月頃の第二世代のふ化最盛期の3～4日後に薬剤を散布する。

2. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査(図1 参照)

虫数：3.0頭/4ヶ所(平年7.0頭、前年0.1頭)

平年比：やや少(一～±)

②吸引粘着トラップ(図2 参照)

平年比：多(+)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、降水量はやや多く、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 6月上旬頃から発生密度が高くなるため、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

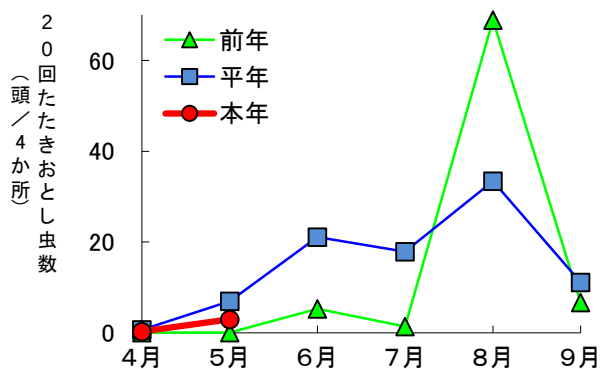


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

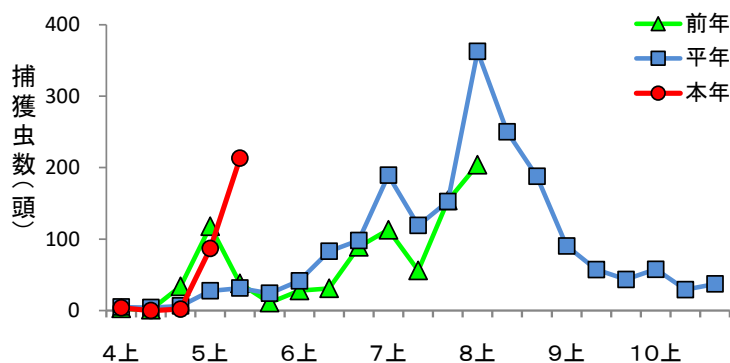


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

3. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：2.1 頭/4ヶ所 (平年 1.6 頭、前年 0.9 頭)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。
- (2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

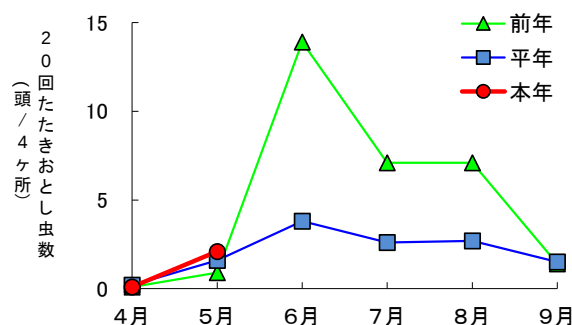


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

4. チャノコカクモンハマキ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

被害葉数：0.1 枚/m² (平年 0.1 枚、前年 0.1 枚)

平年比：並 (±)

② フェロモントラップ (図2 参照)

平年比：やや多 (±~+)

(2) 6月の気象予報

気温はやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発蛾最盛期から7～10日後頃の若齢幼虫期に防除を行う。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

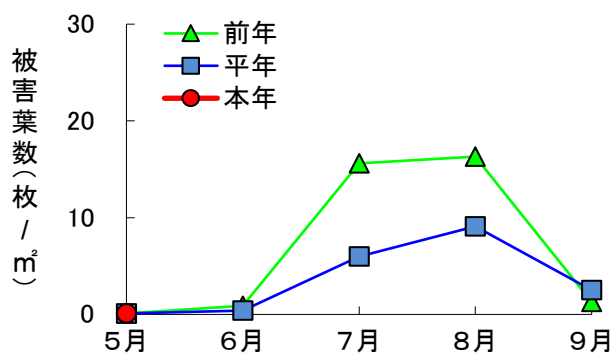


図1 チャノコカクモンハマキの被害葉数の推移

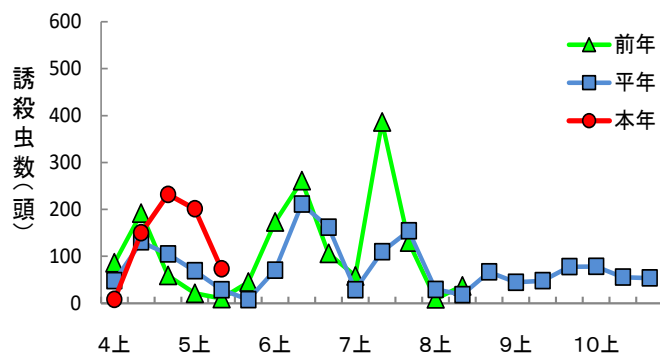


図2 フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの旬別誘殺数の推移(嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kijji00321899/index.html>

